「和解の使者」

向谷地　生良

長い間、精神障害を持つ人たちの当事者活動のリーダーとして、さらには社会福祉法人浦河べてるの家の理事長、有限会社福祉ショップべてるの代表取締役としての務めを果たしてこられた佐々木實さんが、10日（金）の朝、自宅で静かに息を引き取られ天に召された。79年の生涯であった。

年明け、膀胱がんが見つかり、長くて一年の命と伝えられ、佐々木さんは身辺を整理し、仲間と暮らす在宅での看取りを希望し、最後の最後まで、べてるでの仲間との交流と礼拝をかかさずに続けてきた。

退院祝いで（1978） 佐々木さん36歳

私と佐々木實さんの最初の出会いは1977年12月だった。唯一、就職先が定まらない私に大学の先生からかかってきた「就職が決まってなかったら、浦河赤十字病院を受けてみないか、受けるだけでいいから」という一本の電話からだった。難病患者運動や特養での住み込み経験、死刑囚との文通を通じた交流、ハンセン氏病の啓発活動などに関わることで生まれたさまざまな問いを前にして「就職」に踏み切れないままに、卒論に没頭していた矢先だった。浦河赤十字病院は、何度となく就職コーナーに掲示されながら、応募者がいなくて期限切れとなっていた就職先であった。それもそのはずで、まず、「精神科」「田舎」「ひとり職場」「日高管内最初のソーシャルワーカー」という条件を聞いただけで、尻込みをしてしまう。そんな時代だった。当時から、好条件には関心がわかず、悪条件に食いつく習性があった私は、「練習のつもり」で受けることにし、浦河赤十字病院で数日間の採用試験に臨んだ。そこで出会ったのが、7年間の入院中で、来春に退院を予定している佐々木實さんであった。

そして、精神科専属のソーシャルワーカーとして採用になってはじめて行った仕事が佐々木さんの退院支援であった。写真は、1978年7月に退院となった佐々木さん（当時36歳）を囲んで仲間と共に開催した焼肉屋でおこなった“退院祝い”のスナップである。これが、べてるの家につながる当事者活動の記念すべきはじまりだった。

べてる祭りで挨拶する佐々木實さん

1979年4月に、私は病院の寮を出て浦河伝道所の一室を借りて住み込むことになった。それは、無牧師の教会で空き部屋が

多かったこともあり有効活用と財政的な一助になればと考えたのと、一つの試みを抱いていた。それは、メンバーと一緒に暮らすという“実験”であった。そのイメージの背景には、学生時代に学んだソーシャルワークのルーツである1800年代の半ばに、英国における産業革命による繁栄のもとでロンドンの郊外に広がるスラム街に移住（セツルメント）し、寝食を共にしながら貧困問題を考えようとしたセツラ―と呼ばれる若者たちの姿があった。私のソーシャルワーカーとしての第一歩は文字通り「セツラ―」としてのはじまりであった。このセツルメントにはもう一つの吟意がある。それは「和解」である。つまり、ソーシャルワーカーとは、「和解」をもたらすことを期待されているのである。

端的に言ってソーシャルワークというのは、「腹が立つ」ことが多い仕事である。というのも、心の病は、「苛立ちの病」といってもいいくらい、当事者自身の苛立ちと周りの苛立ちが渦をまき、事態を複雑にし、関係を壊し、人の命と暮らしを蝕んでいく。私は、その「苛立ち」の渦に巻き込まれる中で生じる自分の苛立ちと自己嫌悪によって、何度となく自分の立ち位置を見失いかけたことがあった。ロンドンのイーストエンドに広がったスラム街も、そのような現実であったに違いない。そこで私は、古い会堂で、セツルメントを再現してみようと考えた。そして、与えられた最初の入居者が佐々木實さん（1980年）であった。

以来、1988年の下請けを脱し、自前での昆布の買い付け、1993年の会社設立（社長就任）、さらには2002年の社会福祉法人（理事長就任）の設立など節目節目で、物心両面で私たちを支えていただき、特に来月（10月）完成が予定されている浦河教会の新会堂と地階の納骨堂は、佐々木實さんがいなくては実現しなかっただろう。

べてるの家の本−和解の時代（1992）

11日の午前3時過ぎに病床に臥す佐々木さんに付き添っているスタッフから、容態の変化を知らせる緊急の電話が入り、私は原稿書きの仕事を中断して妻と一緒に佐々木さんの部屋を訪ねた。私は、佐々木さんを囲み、つかの間の時間を共有し、43年間の佐々木さんと過ごした時間を思い起こし、若いスタッフとも語り合った。ベッドに横になり、時折、酸素吸入をしているマスクに手をやりながら、苦しい息の中で、静かにたたずむ佐々木さんの枕元には、愛用のラジオが置かれ懐かしい昭和の音楽が流れていた。私は一時間程滞在し、佐々木さんの安静を確認し、自宅に戻り、仕事を続けた。その時、私は、ふと佐々木さんが枕元で聴いていた NHK ラジオ「ラジオ深夜便」を一緒に聴きたいという思いにかられて、スイッチを入れた。ラジオは音楽の時間が終わり、「人生の道しるべ・アンコール」の時間になり、村上里和アナウンサーがノンフィクション作家の柳田邦男氏にインタビューをしていた。その中で柳田氏は「人は“物語”を生きている」と語り、その人が亡くなった後も、残されたちの記憶の中に残り、成長を続ける人生、つまり「死後生」について話していた。まさしく、佐々木實さんの人生を象徴するような言葉だと思った。そして、この同じ時間に柳田邦男の言葉を枕元で聴いているであろう佐々木さんに思いを馳せ胸が熱くなった。

ラジオの柳田邦男の番組が終わると同時に、再びスタッフから緊急の電話が入った。それは、佐々木實さんの安らかな旅立ちを知らせる訃報であった。

佐々木實さんが亡くなり、それを伝え聞いた古くからの仲間が早朝にもかかわらず駆け付けてくれた。いつも安倍総理から振り込まれているはずだといって「3000億円」の預金を引き出すために銀行の窓口に足を運ぶ幻覚妄想大会の常連のたかしさんが、泣きじゃくりながら走ってきた。玄関に入ると同時に、私に向かって泣きながら「佐々木さんは、いい人だった。絶対、死んでない。俺の母さんも、兄貴も、みんな星になって生きてるよ。夜道を歩くと、星が“タッか、元気か”って話してくるし、あれは生きてる証拠だよ。佐々木さんも、星になったんだよ」と言って泣き、横たわる佐々木實さんの手に優しく触れた。

その後、一人のスタッフが目を泣きはらしながら話してくれた。それは、数日前のことだった。病床に横たわる佐々木さんに思わず話したくなり、自分がいまだに受け入れられない人の存在と出来事を話し、聴いてもらったというのである。すると苦しい息の中で、それを聴いていた佐々木さんが一言「きっと和解できる時が来ますよ」と言葉をかけてくれたのだと言う。仕事の帰りに不思議なことが起きた。店に買い物に寄ると、久しく会うことのなかったその人と偶然に遭遇したというのである。そして、今までのように目をそらしてやり過ごそうとした瞬間、佐々木さんの言葉「きっと和解できますよ」という言葉が蘇り、自然にその相手に挨拶をし、和解が出来たというのである。

それを聴いた時、私は自分に起きた駆け出しのころの出来事を思い出していた。当時は、すべての業務がまさに神のような存在であった精神科医の判断と指示によって成り立ち、その領域は絶対不可侵の時代の中で、私が主治医の“患者さん”であった佐々木實さん達と一緒に暮らしはじめるということは、一番やってはいけないことだった。それ以外のさまざまな場面でも、当時の医師からすると自分の立場を脅かす行為を繰り返す私は許し難い存在だったのだろう。その頃、若き研修医として大学の医局から派遣されていた川村敏明先生が私に時折、「〇〇先生が、向谷地君と上手くいってないってこぼしているよ」と、それもニコニコしながら教えてくれた。「上手くいってない」と聴いて、そんな自覚が全くなく、その先生を嫌いでもなかった私は驚いた記憶があるが、その自覚の無さが、相手を不快な気分にさせるといういつものパターンだった。

忘れもしない1984年4月、「浦河べてるの家」が発足したと同時に、「君とは仕事をしたくない。ぼくが院長だったら君は首だから」とその先生に廊下で告げられ、精神科への出入りと、患者さんとの接触の禁止を申し渡されて医事課の窓際に配置換えとなった。ちょうど結婚をし、生まれた子どもも一歳に満たない時期だった。私は人生の重大な岐路に立たされ、追い込まれ絶望的な心境になった時、沸々と湧き上がったのがさまざまな困難や自分以上の絶望を生きてきた佐々木實さんや潔さん達の経験に少しだけ近づけたかもしれないという不思議な高揚感だった。

私は、誰よりも一人の“クライエント”であった。そう思った時、私は、自然に「佐々木實さんに相談してみよう」と思いたち、素直に気持ちを打ち明け、聴いてもらった。佐々木さんは「向谷地さんも大変ですね。でも、何とかなりますよ」と言ってくれた。当然、これも当時は一番やってはいけないことだった。しかし、私には、それがもっと

も自然なことだった。ここから生まれたのが、人の相談を受ける以上に「相談するソーシャルワーカー」という立ち位置であった。その結果、私は“窓際”という見通しの無い苦労の中に居ながらも、落ち着きと、大切な経験がはじまっている手ごたえを感じることができた。

佐々木さんに相談した後、自分がとったのは、自分を追い出した「先生の悪口を言わない」「自分を浦河に呼んでくれた先生のいいところを陰で言う」作戦だった。朝、病院の長い廊下の向こうから、先生が歩いてくる場面に遭遇した時は、ドキドキしながら、いつものように挨拶を続けた。勿論、先生は無言のまま通り過ぎ、挨拶はなかった。それから、５年目が経過した年の師走、忘年会を前にして、その先生が私と話したがっているということを固定医として浦河に赴任したての川村敏明先生が私に伝えてくれた。そこで私は忘年会の会場で、先生に恐る恐る声をかけた。すると返ってきたのは、「君には負けたよ・・・」という短い言葉と握手だった。５年目の和解だった。

佐々木實さんこそ、私たちにとっての「和解の使者」だったのだと思う。この町で生きてもっとも惨めなことの象徴であった「第７病棟」で７年を過ごし、和解の種を蒔き続けた佐々木實さんの人生は、いま、終わると同時に、再び残された一人一人の中で始まったような気がする。

佐々木實さん、本当にありがとうございました。新しい教会の地階にできる共同住居のような「誰でも利用できるオープンな納骨堂」の最初の入居者として、歓迎いたします。佐々木さんの隣には、私も、川村敏明先生、そして早坂潔さん達仲間も「生前入居」を予定しています。そこで、また、楽しく語り、人生を研究し合いましょう。